



数年前、モスクワの地でのこと。ユダヤ教の礼拝堂(シナゴーク)で、大みそかの行事に参加した。何を言っているのかさっぱり分からないスピーチ。その後、とても日本語とは思えない訳が続く。その状態を察したのか、同行していた杉原伸生氏(あの杉原千畝の四男)がスピーチの日本語訳もやってのけた。きちんとした日本語にやっとなり、留飲が下がった。

ユダヤから  
五輪まで



辻畑 隆子

強制収容の時代、秘密扱いはあっても、当時のドイツ国民は、虐殺や迫害を知っていたはず。しかし、目を閉じ、口をつぐむ。ほとんどの人々は見て見ぬふりをするしかなかった。

周囲を見渡すとほとんどが年配者。笑顔は一人もない。私の人生で味わったことのない、底知れぬ闇が背後から迫ってくる。例えるなら、映画の特殊メイクでデフォルメされた顔のよう。その苦しみの極限は表皮にプリ

新型コロナ禍の下、東京五輪がスタートした。その華やかで明るい中に加えられる人は幸せ。しかし、五輪どころではなく日々の生活に苦しんでいる人々がいる。かつてのドイツ国民のように見て見ぬふりはないのか?

(彫刻家・日出町)

ントされているようで、とても直視はできなかった。終了後、軽食のパーティーが。しかし、喉を通らない。ユダヤ人というだけで! どうせ虐殺するからと、食事も与えず、空腹と喉の渇きのまま...。600万人を駆除?! 人間としての尊厳のかげらすらなく。